

スが到着すると、民族楽器の演奏で迎えられた。PY一人一人が生花で作ったブレスレットやギフト、軽食を受け取った。RGNIYDから盛大な歓迎を受け、PYは笑顔をつかべ、現地の言葉で挨拶をした。

講堂に移動し、RGNIYDのラタ・ピライ所長から歓迎の挨拶があり、須江雅彦団長が謝辞を述べ、続いて、各国ナショナル・プレゼンテーションが行われた。歌や踊りを交えた文化紹介を行い、PYはRGNIYDの生徒から拍手喝采を浴びた。



18時半から、ザ・パーク・チェンナイ・ホテルにてインド政府主催のレセプションが行われた。冒頭にインド政府関係者、須江雅彦団長、馬場誠治チェンナイ総領事の挨拶があった。ギフト交換の後、インドの伝統的な歌や踊りが披露され、PYは真剣な顔つきで鑑賞していた。

その後、夕食が振舞われ、PYは食事を堪能しながら来賓の方々と積極的に会話していた。最初は緊張した様子であったが、徐々に笑顔を見せ、有意義な時間を楽しんでいた。



2月12日はフェニックス・マーケット・シティでのフリータイムとなり、PYは買い物のほか、近隣の村を訪問するなど、思い思いの時間を過ごした。午後3時に集合し、全員で船に戻り、出国の手続きの後、午後6時にスリランカへ向けて出航した。

Ship of World Youth docks in city

CHENNAI: Japanese ship Nippon Maru (also known as Ship of World Youth) from Yokohama landed in the city on Tuesday, with 240 delegates of the Next Generation Global Leaders program.

Around 120 Japanese youngsters and 120 delegates from countries like Chile, India, Sri Lanka, New Zealand, Australia and many others will spend the next few days in Chennai, attending academic discourses, engaging in discussions with local youth and getting a glimpse of the local culture.

In Chennai, these delegates will visit Kalakshetra as well as institutions like IIT Madras, Anna University and MOP Vaishnav College for Women, to engage and observe innovative initiatives on youth entrepreneurship, environment, disaster risk reduction, information and media, education and community development. They will be hosted by the Rajiv Gandhi National Institute of Youth Development (RGNIYD).

Hamid Alawadhi from UAE said that he's excited to experience the hospitality of India. "I've been to India twice already and have experienced the wonderful hospitality. I'm looking forward to touching the local culture through interacting with people here. I think interacting with people from other cultures will give us a broader



Delegates from Yokohama

world view and enable us to be better youth leaders," said this youngster.

For Japanese student Kodai Asai, meeting youngsters from other countries and cultures was an eye-opener. "When we read newspapers, one gets a stereotypical view of people from other countries. But having lived and interacted with different people, I must say that I really love them," he said.

Muazz Al-Arabi from Bahrain said, "I've heard so much about Indian food and I can't wait to try it. I hope it's not too spicy." For Indian delegate Sweety from UP, it was a homecoming of sorts. "I'm happy to be back in my country. I'm looking forward to introduce our culture to my friends here," she said.

参加青年の感想 (アンケートより抜粋)

<良かった点>

様々な価値観や自分の人生、そして将来どのように生きていきたいかを知ることができた。

四日間お世話になった全ての方々、特に御協力くださったボランティアとRGNIYDの皆さんに感謝したい。一番の思い出は人々のおもてなしだ。皆が非常に親切だったのでとても感謝している。自らの人生を考え、変化する大切な機会になった。将来、特に子供の教育や高齢者介護を通じて社会へ貢献したい。

正直に言うと、来る前はインドに対して悪いイメージを持っていた。しかし今ではマハーバーラタにすばらしいイメージを抱いている。

インドの文化と現状を深く知る大変良い機会だった。活動を通じて、単に旅行したり一人で調査したりするだけでは学べないであろう多くのことを学んだ。

インドの全てを見てその文化を理解できたとは思えないが、少なくとも以前インドに対して持っていた偏見や見方を変えることができた。

バスに乗って、洪水の被害を受けた人たちを見た。ショックだった。あんな状況は今までテレビでしか見たことがなかった。貧富の差が大きな問題だと思った。独自の文化やスタイルを持つインドの人々と出会っても光栄だった。このプログラムは、自分とは違う様々な民族の人たちと良い関係を持つ上で役に立ったと思う。

この四日間は、インドの文化や歴史に対する理解を深める上で役立ったと思う。同事業の前にインドの映画を見て、とても気に入っていた。その上で踊りを見たり食べ物を味わったりしたので、信じられないほどの経験だった。

滞在時間が充分ではなかったが、カラクシェトラ芸術学院やRGNIYDの学生、ex-PYと話せたので満足した。インドの日々は、ex-PYの温かい歓迎やボランティアスタッフ、訪問国活動に関わってくださるその他多くの方々のお陰で大変すばらしかった。

<カラクシェトラ芸術学院訪問>

自国について話し、多くを共有するのがとても楽しかった。カラクシェトラ芸術学院への訪問では学校の雰囲気や学生と踊りの先生の精神を感じることができ、記憶に残るものとなった。

チェンナイでの活動、特にカラクシェトラ芸術学院は楽しむことができたし、感銘を受けた。伝統的な技術を見学するだけでなく、話し合うこともできた。とても興味深かった。

カラクシェトラ芸術学院では、ハイレベルの踊りを多く見学し、とても親切に教えてもらった。インドの踊りは今まで見たことがなかったので、非常に興奮した。RGNIYDでもインドの様々な文化について知り、学ぶことができた。この経験から、またインドを訪問したいと思うようになった。

カラクシェトラ芸術学院は観光客向けだと感じた。美しいダンスを見る時間は楽しかったが、私たちは観光に行ったのではない。インド経済や社会問題を理解する時間の方が、踊りの見物よりも重要である。

<コース・ディスカッション別課題別視察>

女子大学の学生とインドと日本の違いについて議論をした時間がとても良かった。

私の忘れられない思い出は、地元インドの学生と議論をしたことだ。インドの現状、例えばマドラス大学での学生の活動や勉強について学んだ。

インド工科大学（IIT）マドラス校イノベーションセンターへの課題別視察には大変感銘を受けた。インドにおけるイノベーションプロセスの概念を知った。

課題別視察では、管理が大変だとは思いますが、学生と交流して考えの共有をする時間がもっとあればと思った。

<RGNIYDでの活動>

RGNIYDはとても良かった。ファシリテーターが非常に力強い女性で活動内容がよく準備されており、学生と議論して意見や状況の交換をすることができた。

最も印象に残ったのは、初めて地元の人々と交流し、意見交換をしたときのことである。特にRGNIYDの学生は本当に親切だった。彼らと共に語り、友情を育む時間はあっという間に過ぎ去った。

RGNIYDでの講義は長すぎて集中できなかった。ディスカッションの予定だと思っていたが、全部講義だった。インドを様々な視点から探求する時間が更にあつたら良かったと思う。

各活動が時間的に厳しすぎたので、全てに満足はしていない。特にRGNIYDでの講義では、学生と議論することができなかった。それを一番の楽しみにしていたので、少しがっかりした。

<SWYAAインド及び既参加青年について>

チェンナイでの活動、特にインドの事後活動組織が積極的に参加している活動を楽しんだ。私はSWY24のex-PYで当時もチェンナイを訪問したので、今回は企画のレベルがより高いという違いを感じることができた。ex-PYに感謝する。良い寺院に案内してくれ、ガイドをしてくれた。

インドのex-PYのおもてなしは我々の期待を上回るものだった。彼らに出会い、SWYとのつながりを見るのは必要不可欠だった。

<改善すべき点>

訪問国活動にPYがもっと関与することができるし、寄港前に船内活動の時間をより多く使ってインドに関する概念や課題、環境などを学べるのではないだろうか。次回は、ショッピングモールの代わりにもっと地元の市場に連れて行ってほしい。全体的にはとても良かったし、食べ物は美味だった。

自由時間にショッピングセンターに行くのは同事業の目的とはかけ離れているのではないかと。管理部は現実のインドを訪れるよりも「安全地帯」に留まることを選んだのだと思う。

インドを更に発見するための課題別視察がもっと多ければ良かった。現地のお宅を訪問する機会があれば嬉しかった。

もし可能であれば、人々の暮らしについてもっと多くを知りたい。現地の学生と議論する時間を更に持ちたかった。

訪問前にこれから行く場所についての情報や説明がなく、深く理解することができなかったと感じた。

自由時間については、PYを小グループに分けてインドのex-PYと交流できるようにする方が良いのではないかと。私は大きなグループにいたため、努力をしたにもかかわらずex-PYと話す時間がなかった。

スリランカ (コロンボ)

2月14日 (1日目)	
10:00	コロンボ港到着
10:30 10:45	埠頭での歓迎レセプション
11:20 12:00	スリランカ国家青年サービス評議会(NYSC)とSWYAAによるオリエンテーション
11:30 12:30	ラウンジ「海」にて記者会見
12:00 13:00	船内にて昼食
12:30 17:00	ニロシャン・ペレーラ政策・経済担当大臣表敬訪問(各国NLのみ)
13:00 17:00	フリータイム(PY)
19:00 21:00	NYSC主催船上レセプション
21:00 21:30	マイトリーパーラ・シリセーナ大統領訪船
2月15日 (2日目)	
8:15	コース・ディスカッションごとにバスに集合
9:30 11:30	コース・ディスカッション別課題別視察 <ul style="list-style-type: none"> - 地域づくりコース: ラナヴィル・ケア・センター - 防災コース: 防災センター(DMC) - 教育コース: 盲ろう学校 - 環境コース: アーキュルヴェーダ研究所 - 情報メディアコース: インディペンデント・テレビ・ネットワーク(ITN) - 青年起業コース: 国立宝石宝飾品局 (NGJA)
11:45	首相官邸へ出発
12:30 13:30	首相官邸にてサガラ・ラトナヤケ治安・南部開発担当大臣によるスリランカ首相主催昼食会
13:30	国家青年サービス評議会(NYSC)へ出発
14:00 19:30	NYSCでの活動 <ul style="list-style-type: none"> - スリランカと日本の武道 - サッカー親善試合 - カルチャー・ショー(ミニ・ナショナル・プレゼンテーション)
19:45 20:30	帰船
20:30 22:00	船内で夕食
2月16日 (3日目)	
8:15	バスに集合
8:30	三地域で実施されたホームビジット・プログラムへ出発 <ol style="list-style-type: none"> 1. スリ・サイラサラマヤ(マダパサ) 2. サンカルパ(マカングラ) 3. パラマ・ダンマ・ニケサナラマヤ(ボクングラ)
10:00 20:00	ホストファミリーと共に終日過ごす(昼食と夕食含む)
21:00	帰船
2月17日 (4日目)	
8:30 10:30	オープンシップ
12:00	シンガポールへ出航

2月14日午前10時、コロンボへ入港した。入港後、埠頭にてスリランカ民主社会主義共和国政府による盛大な歓迎パフォーマンスが披露された。乗下船許可が出た後、団長、管理官、各国NLが下船し、歓迎の花輪をかけられた。



ドルフィンホールでSWYAAスリランカによる船上オリエンテーションが行われた。一方、ラウンジ「海」で地元の記者を招いて記者会見が行われた。会見は、NYSC議長兼局長であるW.G.S.エランダ氏の挨拶で始まった。エランダ氏は、本事業は国際交流のための非常に良い機会であること、スリランカ政府もこのような事業を実施したいと考えていると述べた。次に、上村秀紀管理官が事業の目的、内容、参加者、スケジュール等の概要を説明した。続いて、須江雅彦団長からの報告、在スリランカ日本国大使館を代表して、ジャナク・バンダラナイケ氏の挨拶、SWYAAスリランカ会長ブディカ・イッダマルゴダ氏の挨拶があり、日本のNL鈴木美穂氏とスリランカのNLであるハサンティ・ブラシャルハ氏がプログラムの感想を述べた。

最後に、質疑応答があり、記者がSWYの経験がどのようにスリランカ国内で共有されるのかと質問し、スリランカ側はユース・クラブを通して共有すると回答した。会見後、記者団は船内見学をした。

記者会見後、NLはネゴンボビーチに移動し、政策・経済担当ニロシャン・ペレーラ大臣への表敬訪問を行った。参加青年はSWYAAスリランカのサポートによりコロンボ市内で自由時間を過ごした。

午後7時、スリランカ国家青年サービス評議会議長兼局長であるW.G.S.エランダ氏主催の船上レセプションが開催された。来賓として、菅沼健一在スリランカ日本国大使館特命全権大使、ブディカ・イッダマルゴダSWYAAスリランカ会長、ニロシャン・ペレーラ政策・経済担当大臣が出席された。午後9時にスリランカ民主社会主義共和国マイトリーパーラ・シリセーナ大統領が訪船され、NLと懇談後、船内を見学された。

2月15日午前、午後は、六つのコース・ディスカッ

ションに分かれて課題別視察を行った。各コース別の活動は以下のとおりである。

地域づくりコース：ラナヴィル・ケア・センター
(Ranaviru Care Center)

地域づくりコースは2009年に終わった内戦で負傷し、身体障害を負った兵士を支援するためにスリランカ軍が設立したりハビリ施設、ラナヴィル・ケア・センターを訪問した。初めに施設の指揮官からリハビリシステムの概要について説明を受け、その後施設内を見学した。

概要説明で最も印象的だったことは、負傷した兵士がリハビリ施設で受けられるサービスのメニューが豊富であり、また包括的であることだ。例えば、利用者は物理療法・水治療法・作業療法・言語療法など幅広いセラピーを受けられる。その他特殊教育・歯の治療・補装具の発注・リスニング用の図書館・アールヴェーダ治療などのサービスや娯楽活動に参加できる。またリハビリ施設では兵士に裁縫の職業指導をし、提携している国営の衣料品工場で雇用の機会を提供している。

スリランカ軍はリハビリ施設に加え、リハビリ後の追加サービスも提供している。現在補装具の維持・生活保護に関する問題・心的外傷や身体障害の回復を支援するための定期的なリハビリのプログラムと年次ワークショップが行われている。全身麻痺などの障害を負った兵士には四つの保養所で生涯を通じて医療を受けられるように設計されている。

今回の訪問では大規模なリハビリシステムのほんの一部しか見学できなかったために、PYからは、兵士や兵士の家族と直接接することで兵士の軍歴やニーズ、またサービスに対する満足度・充実度・平等性について知りたいという意見があった。また、「リハビリ施設を見学することでサービスの質に対する洞察を得たい」「衣料品工場や地域の取組を見学することで復帰計画がどのくらい機能しているか知りたい」など、コースの学びを踏まえた意見も多く挙がった。利用者と触れ合うことで、兵士の多くは本来の身体・知覚・知的能力を奪われ、内戦後も、彼らの戦いは今でも続いていると感じ、また、兵士の身体的・精神的・金銭的損失は深く複雑で個人差があることについても知ることができた。軍人のためのリハビリシステムを構築する上で最も重要なことは兵士の痛みと共に、健康的で生産的な生活に復帰するまでのそれぞれの道のりを個々にサポートすることではないかと思う。

防災コース：防災センター
(Disaster Management Center)

防災コースは、災害管理省が管轄する防災センターを訪問した。プリヤンタ・サマラコディ共同事務局長からは、災害管理省が設立された背景として、過去最大の国

内災害である2004年のスマトラ沖地震による、インド洋津波について説明し、以降の経緯について伺った。アノジャ・セネヴィラトネ減災・研究・開発担当ディレクターからは、伝統的な価値観と、地域社会を基礎としたアプローチ、特に、村落における資源分配や、スリランカの多様な宗教コミュニティにおける差別の根絶が、防災・減災にどのように貢献するかを、事例を交え、詳細な説明があった。また、災害管理省及び関連組織の最大の役割の一つは、国家緊急対応計画の実行である。プリンセリ・リヤナゲ海軍准将・緊急対策担当ディレクターは、国家緊急対応計画が、地震、津波、土砂災害、ハリケーンなどあらゆる災害に対して、近隣国の災害事例を分析するなどの方法で、国家として対策を講じていることを説明した。

質疑応答では、教育カリキュラムの中で防災がどのように取り入れられているか、地元のNGOや市民団体からどのように支援を動員するかについて、PYが質問した。回答として、伝統的な防災手法や村落の長老の豊かな知識が、災害を予測したり説明したりする上で有効であることが特に強調された。

PYは、尊厳及び人命の保護のために事前の備え及び効果的な防災計画を目的とするという点において、スリランカ政府の目指すものはコース・ディスカッションでの学びと一致することに気付いた。特に、災害から国家の安全を守るには、SWYによる世界中の青年によるソーシャルネットワークと本事業で学んだスキルを合わせることが不可欠であると考えた。

教育コース：盲・ろう学校 (School for Deaf and Blind)

教育コースは、視覚障害もしくは聴覚障害を持つ児童のための学校を訪問した。盲学校の校舎に到着すると、綺麗な花を持った生徒たちが列を作り、PYを出迎えてくれた。PYは生徒と手をつないで校舎の中へと進んだ。目が不自由な生徒たちが自分の考えをシンハラ語や英語で書き出すことのできるコンピューターが設置されている教室を見学したが、コンピューターの数は全ての生徒が使うには不十分だった。また、点字の読み書き、手話、数学、科学、そして国語を教えているクラスも見学した。

その後、盲学校・ろう学校それぞれの校長先生の歓迎のスピーチを聞き、動画でのプレゼンテーションでは、1912年に設立された学校の過去と現在が紹介された。そして、目が不自由な生徒たちは打楽器を演奏して曲を披露し、また耳が不自由な生徒は民族衣装に身を包み、伝統的なダンスを披露してくれた。

その後、PYは両校の生徒や先生と話をする機会に恵まれた。生徒はPYにスリランカ国歌を手話で教えたり、ヘアサロンで生徒がPYの髪の毛のセットをしたり、自由に交流を楽しんだ。先生と教育についての議論をする

PYの近くには、生徒の手芸作品が並べられたテーブルもあった。

PYは、あらゆる方法でコミュニケーションを取ろうと努力し、様々な形で心からのつながりを作ろうとしている生徒たちに出会い、聴覚や視覚の障害が相互のコミュニケーションを妨げているのではなく、自分の先入観が彼らとのコミュニケーションを妨げているのだということに改めて気付いた。障害に対して自らが壁を作っていたことを認識できたことで、多くのPYは今回の訪問で出会った先生、生徒とのつながりを、この訪問だけで終えるのではなく、これからも保ち、もっと子供たちが社会で平等な機会を得られるように貢献したいと言った。生徒と触れ合い、人はそれぞれ異なった学びの形を持っているということに気づき、教育的リーダーにとって、全ての人の才能や知恵をつなげることができる能力の必要性を感じることでできる貴重な経験となった。

環境コース：アーユルヴェーダ研究所

(Bandaranaike Memorial Ayurvedha Research Institute)

環境コースは、アーユルヴェーダ研究所を訪問し、スリランカ伝統医療や、心と身体の健康に関する思想について学んだ。施設に到着すると、敷地内の薬用植物の森（ハーブ庭園）を見渡すことができた。入り口まで出迎えてくださったK.K.D.S.Ranaweera教授と共に、きれいな空気の中を歩き、時々、植物の説明なども聞きながら、講堂にたどり着いた。講堂前では多くの職員がPYを出迎えてくれた。講堂内での歓迎式典では、用意されていたモニュメントに各国のPYがキャンドルで点火するという行事を体験した。その後、病院とアーユルヴェーダを用いた実際の施術の様子、施術に用いる植物標本、庭園内の堆肥作成場所を見学した。最後に国ごとに庭園内に薬用樹を植樹した。

PYは、スリランカ伝統の医療（生活体系）であるアーユルヴェーダは様々な薬用植物を用いて施術していくということ、庭園内に植えられた多種多様な植物やその標本を見学することで体感した。施術室に仏像が祀られている様子や、薬剤の調合、患者への塗布時に職員の方が合掌しながら行っている光景などから、この医療が病に対して、身体と精神のつながりや、宗教に根ざした思想を含むものであることを学んだ。環境問題との関わりという点では、アーユルヴェーダの薬剤は、工場からでなく森や庭から採取する自然由来の材料を用いて作ることができ、製造過程での環境汚染が非常に少ないことや、人々の生活において、物質的豊かさではなく、精神的豊かさを重視している点などを学ぶことができた。また、説明の中であった、各国に伝わる伝統医療を見つめ直してみたい、というメッセージも、PYにはとても印象的なものとなった。JPYからは、「日本で処方

される漢方と共通点が感じられる。もっと植物を利用した医療が普及するとよいと改めて思った」という意見があった。

冒頭におけるキャンドルでの点火式は平和への祈りを込めて、また、最後の植樹会は、環境に対して感謝の気持ちを込めて、それぞれが木を植えた。初めて植樹を体験した参加青年は、こうした共同作業を、各国から集まるPYが共に行えたということがとても感動的だったという感想を共有した。このような有意義な活動の準備をしてくれた施設の職員の方々に感謝の気持ちを伝え、施設を後にした。

情報・メディアコース：インディペンデント・テレビ・ネットワーク (Independent TV Network)

情報・メディアコースは、スリランカで一番古いテレビ局インディペンデント・テレビ・ネットワークを訪問した。施設に到着すると、PYは歓迎パフォーマンスや、カメラクルーによる突然の撮影など、温かく、ユーモアに溢れた歓迎を受けた。案内された最新の講堂では、にっぼん丸がコロンボに入港した際の中継映像や、最近の報道ニュースなどが短く上映された。いずれも、生中継か若しくは速報として配信された映像であり、近年のメディアに求められている「正確かつスピーディな報道」を体現するものばかりだった。実際、職員によるスピーチでは、インディペンデント・テレビ・ネットワークが現代的なメディアとしての役割を果たすために、ニュースの鮮度を常に重要視していると主張していた。

次に、PYは、制作責任者であるマネジャーによるパネル・ディスカッションに参加した。メディアの社会的責任や、独立後のスリランカの発展をメディアがどのように伝えているか、内戦の爪跡や、多言語・多文化社会における取材と報道の在り方など、ディスカッションの題材は多岐にわたった。東京における課題別視察では、日本の民間の報道局を訪問したことに対し、今回は、スリランカの半官半民という独特のスタイルで運営されているテレビ局を訪問したことで、両者の比較を通して、改めてその性質の違いに気付くことができた。また、異なる性質だけではなく、両者に共通する近年のメディアの特徴についても理解することができた。例えば、日本の報道局では、タブレット端末やインターネットを駆使した通信技術と、SNSを活用した配信サービスを行っていたが、インディペンデント・テレビ・ネットワークも、同じようにSNSを取り入れ、若い世代がアクセスしやすい方法で報道しているということ学んだ。

その後、四つのグループに分かれ、普段は一般人が立ち入ることができないテレビやラジオのスタジオ、コントロールルーム、設備室などを見学した。また、スリランカにおいて最も長く愛されているドラマの撮影現場にも立ち会うことができ、PYは非常に貴重な体験をすることができた。

青年起業コース：国立宝石宝飾品局

(National Gem and Jewelry Authority)

青年起業コースは、コロンボの中心地に位置する国立宝石宝飾品局を訪問した。花やキャンドルで演出された歓迎セレモニーの後、PYは施設の説明を受けた。スリランカは世界第2位の宝石産出国であり、特にサファイア、スターサファイアの世界最大の産出国として知られている（ブルーサファイアは国石である）。こうした豊富な原石の資源を持つスリランカでは、宝石産業が国の産業を支える重要な柱となっている一方で、原石の採掘や石の加工、流通において、環境破壊や労働搾取が発生しないように配慮している。例えば、オーストラリアのPYの「地球環境や公正な労働にどう配慮しているのか」という質問に対し、国立宝石宝飾品局の代表者は、「株式会社ではなく、国営宝石局である私たちの立場として、国全体の利益や安全を考えることが使命であり、宝石取引によって得た利益の数パーセントを、採掘が完了した鉱山を、元の自然環境に戻す現状復帰作業料や、作業員の子供たちへの奨学金などに充てている」との回答があった。また、別のPYからは、「世界第2位の宝石産出国でありながら、世界的なマーケットで考えると、スリランカの宝石産業の認知度や地位はまだ低く感じるが、それはなぜか」という鋭い質問もあった。回答からは、スリランカは長らく原石の輸出に頼っており、研磨やデザイン、販売、そしてPRの技術や経験が乏しいという背景を知ることができた。これから国内外問わず積極的にビジネスパートナーシップを結び、宝石産出国にふさわしい展開を行っていききたいとのことだった。

その後、施設から徒歩で宝石のカット場へ移動し、カットとデザインを終えたジュエリーの展示場を見学した。光を受けてきらめくネックレスや指輪の数々にあちこちから歓声が上がった。また、訓練を受けた職人たちが、宝石の検査から研磨、カットまでを流れ作業で行っている現場を視察することもでき、限られた時間内で講義、質疑応答、見学という充実した時間を過ごすことができた。スリランカの宝石ビジネスがより広がっていけば、国内に多くの雇用を生み出せることも体感できた。

その後、全てのPYは、首相官邸において、サガラ・ラタナイケ治安・南部開発担当大臣によるスリランカ首相主催昼食会を楽しんだ。

午後、PYは、スリランカで唯一の全国青年団体である国家青年サービス評議会(NYSC)を訪れ、スリランカの伝統的な歓迎を盛大に受けた。スリランカの伝統武芸が披露され、続いて、JPYが剣道、薙刀、弓道、空手を披露して文化交流を行った。さらに、JPYとスリランカの青年によるサッカーの親善試合が行われた。NYSCが